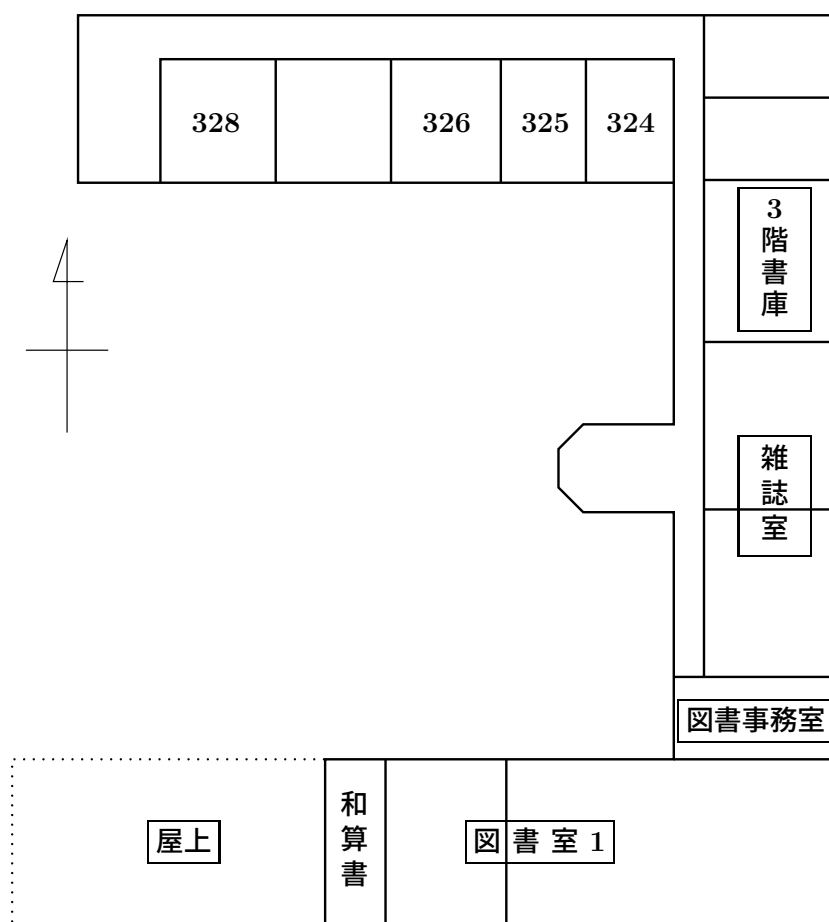


21 世紀の数学図書室 (2)

重川 一郎 (1976 年学部卒業)

2004 年度の始まり

単行本の並べ替えをやり，和算書の整理もやった．いよいよ最後は雑誌である．数学図書としては本丸である．とうとう本丸攻略のときとなった．「先生，この雑誌を何とかしてください．こんなに溢れているんですよ．もう入れるところなんてないんですよ」とずっと阪口さんに言い続けられてきた雑誌だ．本の上に横にして詰め込んでいるようなところもあり，末期的症状だ．とにかくこれを何とかしなければならない．



2006 年以前の理学研究科 3 号館の 3 階平面図

この機会に、雑誌の置かれている場所を説明しておこう。上図は 2006 年以前の理学研究科 3 号館の 3 階平面図である。図を出したからと言って、これから密室殺人のトリックを暴こうというわけではない。あくまでイメージをつかみやすくするための参考に、ということである。ちなみに死番虫が燻蒸されたのは図の 328 号室であった。さて、図書の雑誌は図書事務の北側の部屋に配架されている。二部屋続きであるが通路でつながっているので纏めて雑誌室と呼んでいる。さらに北側にこの雑誌室とは別の一部屋があつて、3 階書庫と呼んでいる。ここにもやはり雑誌が置かれている。雑誌室の方によく使われる雑誌が置かれていて、3 階書庫の方は使用頻度の低い雑誌が置かれている。使用頻度は低くても、3 階書庫の雑誌を見る必要がたまに出てくる。たまにしかいかないので、ほとんどの人が雑誌の配置がどうなっているか分からない。混沌としている、というのが正直なところだ。こういうときに、目的の雑誌が探し出せなくて、結局阪口さんに聞かなければならなくなる、ということがよくあつた。それで誰でも探せるようにアルファベット順に並べ直そう、というのが今回の雑誌の並べ替えの目的でもある。これは以前も述べたが、数学図書の雑誌が国別に分類されていることによる。シリーズ本の分類と同じで Japan, America, Germany, France, England, Italy, China, Miscellaneous と別れている。言語別といってもよいかもしれないが、とにかくどこで出版されているかということを理解しておかないと雑誌が探せない、ということになる。この国別の分類を止めることが課題の一つ。

もう一つの課題は棚から溢れている雑誌を解消することである。全部の雑誌が溢れているわけではないので、全体の配分を考えなおせば収まる。並べ直すときに配分し直せばいいわけである。しかし将来的なことを考えれば、全体的な収容力を増やしたいところだ。雑誌室は、図書事務に近い所は新着雑誌室として一部使っていたが、新着雑誌室は別のところ、上の平面図でいえば 324 号室、325 号室に移動したので空いていた。この空いたところに書架を設置すれば、雑誌を入れることが出来る。そこで手始めに 4 月にその設置を行った。これで入れ物は出来ただけだけど、それだけでは作業が始められない。実際に動き始めるのは年度末の 2 月になってからである。

図書では恒例の行事があり、夏休みには例年通り Open Campus が開催され、図書も協力した。この年の Open Campus に関しては、私は理学部の委員をやっていたので、理学部全体のことを考える必要があつた。教室企画の方は、梅田さん、加藤(毅)さん、荒井さんにまかせっきりだったが、前年の経験もあり、特に問題なくやれたようだ。とりあえず、年度末までは例年になく静かな年だった。年度末に雑誌の移動を始めたのだが、その前に別のことが割り込んできた。

単行本のシフト

単行本とシリーズ本が置かれている図書室は南ウィングにあり、二部屋続きになっている。その二部屋を使って、東からまずシリーズ本がおかれ、そのあとに単行本が著者名のアルファベット順に並べられている。奥の方の小さめの部屋に単行本の Z の本や、全集が置かれていた。奥の部屋には引き出し式のファイリングキャビネットも置かれていた。そのキャビネットには JMKU の別刷が保管されていた。別刷について説明しておこう。雑誌にはいくつかの論文が掲載されて 1 冊の本になっているが、論文ごとに分冊にしたものを別刷と呼ん

でいる。論文の執筆者に、例えば50冊程度を無料で配布する等の形がとられるが、雑誌によって様々で有料のところもある。執筆者は別刷を配って自分の研究を知ってもらえることが出来るし、あるいは他の研究者から請求されることもある。今なら複写が容易にできるが、昔は複写などなかったり高価だったりしたので、別刷りが論文配布の重要な手段だった訳である。出版元に別刷請求がされることもあって、執筆者だけでなく出版元も別刷を保有していた。JMKUも別刷をたくさん持っていたが、その必要性が無くなって来ていた。そこで、別刷りを廃棄処分した事があった。それがいつだったのかははっきりしない。

空になったファイルキャビネットはそのままにしておいたのだが、使っていないものを置いておくより別のところに持って行って、その跡に書架を付ければ本が収容できる。そういう経緯でここにも書架を設置することにした。シリーズの本の収納場所が不足していたので、それを収納できる。しかし問題があった。その後ろに単行本のZがあるので、単行本が分断されることになる。シリーズ本もそこだけ離れて孤立してしまう。細かく掲示を出して対応できないわけではないが、直感的な配置ではなくなる。自分で探せる図書室ではなくなる。「じゃあ、単行本をシフトすればいいんじゃないの。」思わず口をついて出た言葉に自分自身驚いた。単行本のZ以外をシフトすることになるから単行本のほとんど全部をシフトするということだ。それをすれば確かにすっきりとはする。利点は多いが、労力にかかる。しかし、労力をかけることを厭わなくなっているのも事実で、実際反対する人はいなかった。

2月3日にファイルキャビネットを移動させることからこの作業は始まった。ファイルキャビネットを移動した後は、いつものように現状を調べ、シフトした時の配置を決めていく。単行本は、A、B、Cと並べられているので、それぞれの移動先の開始点を決めていくわけだ。シフトが本格的に始まったのが2月28日。3月1日2日にかけて3日で作業は終わった。3日あれば単行本全体をシフトすることができるということだ。言ってしまうとそれだけなのだが、実際に作業をする学生にとっては結構な重労働ではある。このときに働いてくれたのは、阿部君、伊藤君、甲斐君、福山君、柴山君、源君、丹下君、高木君、河合君といった大学院の学生さんたちだ。何度も移動の作業をしていると、作業のたびに学生も入れ替わり立ち替わりで次々に替わっていく。そのたびに作業の手順を説明しなければならないので手間ではあるのだが、普段は接しないような学生とも面識がもて、わずかながら人脈が広がった気はする。ただ、私はそれをうまく生かすことが未だにできてはいないのがもったいなくはある。

単行本のシフトは予定外の作業だったが、利点もあった。図書室に一時的に空いている書架ができたことになる。この場所自体は雑誌が置けるわけではない。だが一時的な保管場所として使える。本の並べ替えを行うときは、一時的な保管場所の確保というのが一番頭を悩ませるところなのだ。それが今回は期せずして手に入ったわけである。これを僥倖といわずして何と言おう。

雑誌のデータ整理

雑誌を並べ直すためには、全部の雑誌のデータを整理する必要がある。つまり現状を把握する必要がある。

- 現在占めている棚幅

- 継続か打ち切りか
- 継続の場合は毎年どれくらいの割合で増えているのか
- 誌名変更の有無

これらのことを全部調べる必要がある．実際にその雑誌のところへ行って，メジャーで現在占めている棚幅を測る．さらに最近の増え方を見て，1年間でどれくらい増えるか平均を割り出す．こういうことは現物を見ながら確認しなければならない．継続か打ち切りかは図書事務の人にどういう契約になっているか確認してもらう．これは並べるときに，打ち切りになっている雑誌は，次の雑誌と間隔を開ける必要がないからだ．継続のものはどれくらい増えるかを推測して，次の雑誌との間隔を決める．

誌名変更はときに厄介である．雑誌の名前が変わるということはほとんどないように思えるが，実際は思った以上に頻繁に起こる．我々が JMKU も誌名変更をした口だ．2010 年に Journal of Mathematics of Kyoto University は Kyoto Journal of Mathematics (略して KJM) に誌名変更された．さらに言えば，JMKU にはその前身として Memoirs of the College of Science, University of Kyoto というものが存在している．長ったらしいので，メモアと呼んでいるが．この雑誌は戦前は Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University という名前だった．京都大学は，帝国大学と呼ばれていた時代があったのだ．それもそう遠くない昔に．雑誌の名前を追っていくだけで，歴史の流れを感じさせられる．それに加えて Series A とか Series B とかに細かく分かれてもいた．そういうものも全部誌名変更である．外国の雑誌には頻繁に誌名変更が行われているものもあり，雑誌が二つに分かれたり，場合によっては再び一本化されたりと，一体どういう事情によるものかいぶかしくなるものもある．くっついたり離れたり世の習いということらしい．

ところで誌名変更をいちいち調べるのは大変だと思われるかもしれないが，最近は便利なもので国立情報学研究所が提供する Web 上のサービスで「雑誌変遷マップ表示システム」というものがある．興味のある人は実際に当たってみられるとよい．URL は

<https://mokuren.nii.ac.jp/map/utf-8.html>

である．ここへ行って，NCID か FID を入力すれば雑誌変遷マップが表示される．KJM の場合は NCID は AA12478508 であるので，これを入力すると変遷マップ図とともに次のようなリストが表示される．

1. <AA00732059> Memoirs of the College of Science and Engineering, Kyôto Imperial University. – Vol. 1, no. 1 (1903)-v. 6, no. 3 (Mar. 1914).
2. <AA00293185> Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University. – Vol. 1, no. 1 (Oct. 1914)-v. 6, no. 7 ([Oct. 1924]).
3. <AA00732514> Memoirs of the College of Engineering, Kyoto Imperial University = 京都帝國大學工科大学紀要. – Vol. 1, no. 1 (Aug. 1914)-v. 11, no. 6 (June 1947).
4. <AA10526574> Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University. Series A. – Vol. 7, no. 1 (Sept. 1923)-v. 24, no. 2 (Mar. 1944).
5. <AA10526585> Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University. Ser. B. – Vol. 1, no. 1 (1924)-v. 18, [no. 1] (1944).

6. <AA00732503> Memoirs of the Faculty of Engineering, Kyoto University. – Vol. 12, no. 1 (Oct. 1949)-v. 57, pt. 3 (July 1995).
7. <AA10526596> Memoirs of the College of Science, University of Kyoto. Series A. – Vol. 25, no. 1 (Mar. 1947)-v. 31, no. 2 (Feb. 1967).
8. <AA10649224> Memoirs of the College of Science, University of Kyoto. Series B. – Vol. 19, no. 1 (Nov. 1947)-33 (1967).
9. <AA0073206X> Memoirs of the College of Science, University of Kyoto. Ser. A, Mathematics. – Vol. 26 (1950/1951)-v. 33 (1960/1961).
10. <AA00732842> Memoirs of the Faculty of Science, Kyoto University. Series of physics, astrophysics, geophysics and chemistry. – Vol. 32, no. 1 (Sept. 1967)-.
11. <AA00732820> Memoirs of the Faculty of Science, Kyoto University. Series of biology. New series. – Vol. 1, no. 1 (Oct. 1967)-.
12. <AA00732831> Memoirs of the Faculty of Science, Kyoto University. Series of geology and mineralogy. – Vol. 34, no. 1 (Dec. 1967)-.
13. <AA00701791> Journal of mathematics of Kyoto University. – Vol. 1, no. 1 (Sept. 1961)-v. 49, no. 4 (2009).
14. <AA12478508> Kyoto journal of mathematics. – Vol. 50, no. 1 (spring 2010)-.

大本をたどれば工学部と一緒にあったときのデータまでさかのぼれることが分かる。これらの雑誌を数学図書ですべて所有しているわけではないが、必要なものだけ抜き出せばよい。便利にはなっているが、一応こういう誌名変更も意識しながらデータを整理していかなければならない。誌名変更は正確に言えば別の雑誌かもしれないが、数学図書では同じところに纏めておいてある。アルファベット順に並べるときは、最新の誌名で場所を決め、誌名変更前のものと一緒にその前に配置する。そのために誌名変更のデータが必要になるわけである。こうした検索作業には図書事務の人の協力が不可欠で、本当にお世話になった。

データとしては次のようなものを Excel で作るわけだ。これは雑誌室に配架されたものだが、雑誌の総数は 248 種類である。

雑誌名	年号	占有幅	予定増加幅	予定占有幅	備考
Acta Arithmetica	1936-2002	318	17.5	335.5	
Acta Mathematica	1882-2000	417	6	423	
Acta Litterarum ac Scientiarum	1922-1937		0	0	誌名変更

これらのデータ整理は実際は 2003 年度から始められていた。長谷部君という学生が 1 年間をかけて、コツコツと整理してくれた。北海道から出てきたこの寡黙な青年は、いつももの静かで目立たないけれど、地道な作業を粘り強くやり遂げることの出来る好青年であった。2004 年 3 月 25 日に、この労に報いるべくささやかな送別会を遊邑 RAKUZA にて開いた。実は長谷部君は京都大学を去ることになったので、送別会なのである。長谷部君の指導教員の加藤和也さんも交えての楽しい送別会であった。

さて、2004年度になってからは長谷部君の仕事は御代川君に引き継がれた。基本的なデータは得られたので、このデータをもとに雑誌の配架の位置を決めていく必要がある。雑誌は雑誌室と3階書庫の2か所におかれているが、雑誌室の方を主に説明する。雑誌室は2部屋続きで棚数にして74007棚ある。これを雑誌ごとに区割りしていく。Acta Arithmetica が最初にきて、次の雑誌 Acta Mathematica が7棚目の左から5.5cm のところから配架されて、といったようなことをデータを基に計算して決めていく。各雑誌の開始位置は棚の端からのほうがすっきりはするのだが、それほど余裕があるわけではないので、細かな刻みで決めざるを得ないわけである。これを248種類の雑誌について行う、ということになる。こうした作業を御代川君が Excel を使いながらやってくれた。御代川君の指導教員は実は私だったこともあり、私がいろいろ注文を付けるものだから御代川君は大変な思いをしたことだろうと今になって思う。

雑誌の並び替え

単行本のシフトという予定外の作業も入ったが、いよいよ雑誌の並べ替えである。データの整理に追われる学生もいれば、実際に本を動かす学生もいる。ここは体を動かす実働部隊の出番である。この学生さんは RA として給与は出ているわけだが、何分数学の学生は肉体労働に長けているわけではない。京大数学の博士課程の学生といえば、何かひ弱な青白きインテリというイメージが付きまといがち。その彼らが軍手に、物々しいマスクをして（これは花粉症のせいもあるが）数学の本を運ぶ姿は、日本の数学の明るい未来を象徴している、と言ってよいのだろうか。

「ええ～、これを運ぶの～？」

「またやり直し～？」

「もっと楽な方法ないの～？」

などなど、学生も結構言いたい放題なのだが、不平不満を言いながらも、口ほどにはサボらない。やるべきことはちゃんとやってくれる。最初は正直言ってこの頼りなげな学生さんたちが作業をやり終えることができるのだろうかと不安に駆られたこともあった。だがこの史上最悪とも思える弱小軍団が、日に日に力をつけ、頼もしさを増していく姿は感動的でさえあった。後半ではもう立派な精鋭部隊。阿部君が「いやー、これならどこの大学の図書の引越しでも請け負えられそうだ」と言っていたが、これもあながち誇張じゃないかもしれない。

雑誌は雑誌室と3階書庫の2か所に置かれているが、まずは雑誌室のほうからである。単行本のシフトをしたおかげで、図書室の部分に空いている書架ができた。これはありがたかった。図書室の書架は背が高く収容力大きい。スチール製書庫やブックトラックの比ではないのである。これは大いに役に立った。単行本の並べ替えをしたことがあるので、多少のノウハウも身に着けた。単行本と同じように2段階に分けて行う。最初は詰め詰めに入れていく。そのあとシフトをする、というやり方だ。まずは図書室にできた空きの書架を先頭にして雑誌を入れていく。順番に入れていくと、やがて入れる先に元の雑誌が残っていることが起こる。これを一時避難させなければならない。避難場所として、オフィス用のスチール製書庫を運び込んだり、ブックトラックを利用したり、あるいは移動した雑誌跡がまとまって空いているところを利用したりと、やり繰りしながらしのいでいくわけである。

雑誌室の雑誌はよく使われる雑誌なので、各雑誌がまとまったボリュームがある。100巻とか200巻といった単位である。従って、塊ごとの移動という感じで、これは単行本の時とは違った感覚である。量が多いけれど、システムティックに作業を行うことができた。ある程度頭数をそろえて人海戦術で進めていける。ただやはり248種類の雑誌なので、量に圧倒されはする。量の点では単行本よりはるかに多い。それを何とかやり遂げて雑誌室が終わる。

次は3階書庫である。3階書庫の棚数は48232で、雑誌室の74007に比べると少ない。棚幅が短いところもあるので、量的には半分である。雑誌は131種類ある。やることは基本的には同じであるが、3階書庫の雑誌は利用頻度の低い雑誌で、雑誌室の雑誌ほどまとまった量があるものは少ない。廃刊になったり、購入が打ち切りになったりと、継続されていない雑誌も多い。細切れる的と言ってよく、数十冊、数冊といった程度のものばかりである。だから作業はあまり大人数がいても効率が良くない。少人数で局所的にやる感じだ。その場で雑誌の実物を見ながらデータを参照して配置を決めていくということをする。私の仕事は早朝に来て、その日の移動分の確認をし、移動先の指示シールを貼るという下準備から始まった。

この作業が結局3月25日までかかった。夕方近くになってもまだ作業が終わらない。この日は西田孝明教授の定年退職記念パーティーの日だった。だから何が何でも時間内に間に合わせようと必死だった。パーティーがある日だから図書の事務の人は綺麗な洋服を着ているのに、エプロンをつけて3階書庫の雑誌の移動を手伝ってくれた。その甲斐もあってか、なんとか時間内に作業を終え、パーティー会場の京大会館に走りこむという経験もした。こうして何とか3階書庫の雑誌の並べ替えも終わることができた。

2005年度の始まり

雑誌室の並べ替えも終わり、3階書庫の並べ替えも終わった。これで雑誌は全て並べ替えが終わったことになるかというと、いつものことながらそうはならない。雑誌室の方は例によって詰め詰めに入れてある余裕のない状態である。こうすることによって作業スペースを作り出しているのだから。なのでもう一度全体をシフトしないといけない。そのことを学生たちに告げると、「ええ～、また動かすの。始めからその場所に入れとけばいいのに～」と不満の声を上げる。しかし文句を言っても始まらないし、どの道やるしかないのだ。実際のところ、彼らもうすうすう感づいてはいる。それにシフトってそれほど大変じゃないのは経験済みでもある。結局のところ、私にはこの方法しか思いつかなかったのだ。



4月になって陽気もよくなって、桜も咲いて世の中花やいでいる中、学生たちは雑誌のシフトの作業に明け暮れていた。そしてついに4月7日の午前中に雑誌室シフト完了。最後の一冊がActa ArithmeticaのVol. 110。シフトは後ろから詰めていくから、最初のが最後になる訳だ。最後に一冊だけ残してこれをみんなでリレーした。最後の一冊をみんなでリレーして、リレーのたびに写真を撮った。最後に全員集合の記念写真を撮って終わり。午前11時23分。みんなの笑顔が晴れ晴れしている。まあこういう遊

びをよくやったものだった。上の写真、中央にいるのが私で、後列左から（敬称略）荒井，太田，松田，安田，藤原，源，鍛冶，阿部，の面々。当時学生だった人はみんな教授になって数学者として活躍している。

さて、あとは残務整理。いろいろ片付けが残っている。新しい棚が入って番号シールがずれてきたので、はがさなければならない。ところが意外にこれが難物。ペリッと剥がすと、剥がれるのは表面だけ。結局ゴリゴリと擦り取らなければならない。苦戦していると、用務員の大崎さんと織田さんが、シール剥がしのジェルを塗って、ヘラでこすると割りと楽に取れると教えてくれた。確かにそうやると大分楽だ。用務員さんたちって、実は私たちはとてもお世話になっている。作業をするたびに、実はすごいごみが出てくる。ガムテープ、紙切れ、段ボールの切れ端。本はたいてい埃もぐれだから、移動すると有像無像のごみが出てくる。こっちはそんなことはお構いなしに作業しているが、後の掃除はいつも用務員さんたちがしてくれている訳だ。そういう意味では図書は厄介者なのだが、陰できちんと処理してもらっている。図書の仕事って陰の仕事だと思っていたが、そのまた陰で働いてくれている人たちがいる。本当にありがたいことだ。

4月8日、全日程終了。作業の後は決まって宴会。今回はコウシンで行った。図書の事務の人や学生たちでにぎやかな会だった。教員では図書委員長の河野さんも参加した。かくして雑誌の並べ替えもすべて終わり、図書は普段の静けさを取り戻した。

松田さんの激励会

とりあえず、雑誌の移動も終わって図書は一段落。私もやれやれだった。やっと平穏な日々がおとずれた。と思うまもなく5月になって思わぬ事件が起こった。図書事務の松田さん転職。このニュースは衝撃となって数学教室内を駆け抜けた。私にとっても晴天の霹靂。松田さんが数学図書に来たのは2000年。その翌年から図書の移動が始まったので、その間ずっと松田さんは図書の中で縁の下力持ちとして図書を支えていたわけだ。その松田さんが去っていくのは寂しい限り。そこで6月10日に松田さんの激励会をBon Bon Cafeでやることになった。激励会は大変な盛況だった。雑誌の並び替えにかかわった学生もたくさん参加してくれた。学生たちにも図書の存在が身近に感じられるようになったのかもしれない。ビンゴゲームもやって、宴会としては近年にない盛り上がりだった。

松田さんの去った後は、数学事務から橋本さんが図書に来ることになった。

忘年会

年末になってまたまた騒ぎが持ち上がった。3号館に耐震補強工事が入るという。年末になると数学教室も忘年会をやる。この年は12月22日に『和楽食宴座 囲や』で行われた。いつもは和気藹々の宴会だが、このときはこの耐震補強工事の話で持ちきりだった。私はこの忘年会の場で初めて知った。工事の開始は4月だとか、5月だとかいろんな説が飛び交っている。（最終的には7月になった。）耐震工事となれば、3号館は空にしなければならない。全員が退去ということだ。人だけでなく、あるもの全部だ。これは大変なことになった。図書はどうなるのだろうと思う。あの本を全部持ち出すのか。その後また元に戻すということか。

誰がやるんだ．俺がやることになるのか．何も好き好んでやりたくはないが．他に誰がやる．やっぱり俺がやるしかないのかなあ，とちょっと憂鬱な気分だった．まあ今まで図書の本を結局のところ全部動かしたわけだから，図書のことは割とよく分かっているつもりだ．だったら俺がやるしかないか．半分諦めの気分だった．結局私がやることになったし，周りもそれが当然という空気ではあった．

耐震補強工事に向けて

1月になって，数学教室は耐震補強工事に向けて具体的に動き始めた．このときの専攻長は斎藤裕さんで，陣頭指揮をとらなければならなくなった．偶然の巡りあわせとはいえ気の毒なことだ．斎藤さんは耐震工事のためのワーキンググループ(WG)を作ってこれに対処した．2006年1月10日付のメールにWG宛ての斎藤さんのメールがある．メンバーは河野さん，森脇さん，荒井さんに加えて，私も当然のように入れられた．つまり私は図書の引っ越しに責任を持たなければいけないということだ．河野さんは図書委員長というよりも理学部との交渉役ということだろうし，森脇さんは次年度の専攻長ということで入っている．荒井さんは計算機管理者としてだろう．

それにしても専攻長は大変である．引っ越しは，教員の研究室は個人の責任だろうが，教室やセミナー室もあるので，そういう共通のところは専攻長や事務の人が考えなければならない．どこへ一時保管するか，帰るときはどこに戻るのか，といったことを表示しておかなければならない．物を運ぶのは業者がするにしても，行き先の指示は事前にやっておく必要がある．教員の部屋も，一時避難の場所は理学部のどこかで考えなければならないし，避難場所は元の場所より狭いので，溢れた什器などを保管する場所を考えたりと，専攻長として考えなければならないことは多いだろう．斎藤さんはつくづく大変だったろうと思う．

引っ越し準備

2月9日から図書の引っ越しの準備を始める．引っ越しの前にこの際いろいろ整理しておいたほうがよい物も出てくる．JMKUは各巻100冊以上のバックナンバーを保存していたが，30冊だけ残して後は廃棄し，残りは6号館の自然科学史料室へ移動した．3階書庫の雑誌も整理し，Mathematical Reviewsを自然科学史料室へ運んだ．新着雑誌は段ボール箱に詰めて理学部中央図書へ．図書本体を移動する前に，そういう細々したものの整理や移動を行った．その一方で3月17日に京大工学部土木系に見学に行った．こちらでも引っ越しを行っていて，段ボール箱6600個に詰めたそうだ．その一部を見せてもらったが，部屋いっぱいに段ボール箱が詰め込まれて，こういう状態になるのかとため息が出た．これを我々もやらなければならないということだ．

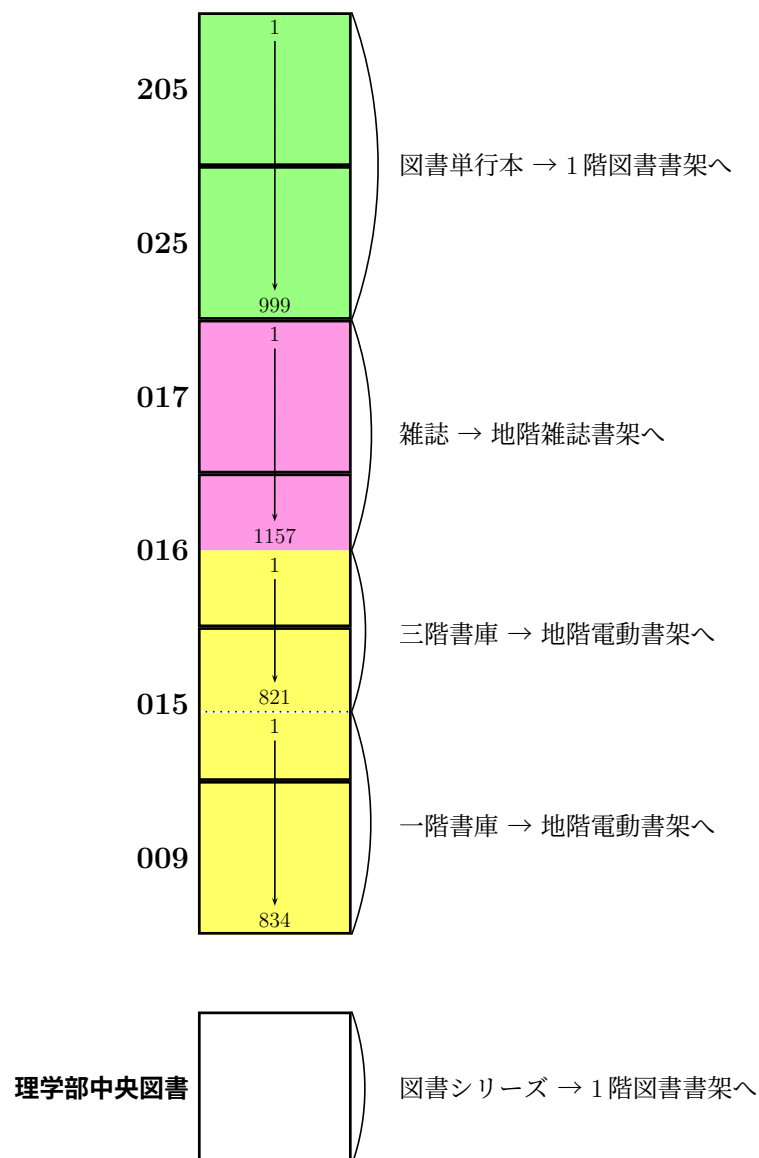
3月になって3号館からの移動も始まり，教員は3月15日に6号館に移った．この日私も6号館の502号室に移った．什器等の移動も始まった．新着雑誌書架は1号館の倉庫に運ばれた．

2006 年度の始まり

3月から引き続いて、引っ越しの準備で教室全体がてんやわんやの状態。私は自分の研究室の移動を既に終えていたので、図書の引っ越しを本格的に始めることになった。その前に図書の引っ越しの全体像をつかめておいた方がいいだろうと思うので、それを見ておく。

引っ越しの概念図

今回の引っ越しで図書はどんなことをやったのか概念図を示しておこう。これを見れば全体的な流れがつかめるのではないかなと思う。



上の図で説明をする。左側に書いてある数字は図書の本を詰めた段ボール箱を運び込んだ1号館の部屋番号である。205号室、025号室、017号室、016号室、015号室、009号室の6

つの部屋に段ボール箱を運び込んだ。一番下の理学部中央図書は、書棚を借りてシリーズ本を保管した。従って段ボール箱は使っていない。さて、上から説明していくと、単行本は205号室、025号室に999個の段ボール箱を使って運び込んだ。右側に1階図書書架と書いてあるのは、元に帰るときの場所を示している。実は図書室は別のところに移って、北ウィングの1階と地階になっている。単行本はその1階部分に戻している。次は雑誌で、雑誌室の分を017号室、016号室の途中までに1157個の段ボール箱を使って運び込んだ。帰るときは、地階の雑誌室に戻している。3階書庫と1階書庫の雑誌は016号室の途中から、015号室、009号室に入れた。それぞれ段ボール箱821個、834個を使っている。帰るときは地階の電動の集密書架に入れている。概略このような作業を行った訳である。シリーズの本は理学部中央図書の書棚を借りることが出来たのでそこに保管した。帰るときは1階の図書室に戻した。

段ボール箱は全部で $999+1157+821+834=3811$ 個使ったことになる。名古屋大学の場合は6000個ということだったが、京都の場合は理学部中央図書の書棚が使えたのと、自然科学史料室の分は引っ越しに関わらないので、ほぼ同じくらいの規模ではないかと思われる。以上が概略で、以下で詳しく説明していく。概略だけで十分理解できた人はこの後読む必要はない。最後の部分に飛ぶと良い。

作業の原則

3800個の段ボール箱と言ったが、これを我々だけで運ぶのは不可能である。それで専門の業者に依頼することになった。段ボール箱に詰めるのと、運搬は業者が行う。我々はどの順番で本を入れていくかを指示すればよいということである。

ところで今回の引っ越しは $A \rightarrow B \rightarrow A$ という図式の引っ越しである。実際は別の場所に戻ることになったので $A \rightarrow B \rightarrow C$ という図式になってしまったが、少なくとも1号館に退避するときは、元の場所に戻るつもりでいた。いずれにしても元の形を再現すればいいだけなので原理的には簡単な部類である。簡単だと言ってしまうと、大抵の引っ越しは簡単なことになってしまうが、言うまでもなく引っ越し自体が大変なことは変わらない。ただ、今の場合それとは別の問題が出てくる。とにかく量が多いということだ。そして作業は第三者の業者が行うということだ。業者は図書の内情に精通しているわけではない。段ボール箱3800個を運ぶには作業はできるだけ単純なものにするべきであろう。さらに作業の動線はできるだけ直線的なほうがよい。棚の途中から別の離れた棚に移り、また戻ってくる、というようなことは避けたほうがよい。作業現場は大勢の人がいて、騒然としているのが常である。複雑なことをきめ細かく現場で伝えられればいいが、それは現実には難しい。以前に話したが、シリーズの本が2カ所に分離しそうになったので、単行本全体をずらせたことがある。これは動線を直線化するという意味では良かったのではないかと、後知恵ではあるが、思うのである。そういうことも一種の幸運だったように思える。そういう訳で、下準備をできるだけきちんとして、当日の作業は単純化する、ということを原則にやっていくことにした。

TeX book

数学をやっている人間は、論文を書かなければいけないので、TeX を習得していることが必須条件になる。TeX は数式も表示できるので数学者にはうってつけなのである。それで TeX の参考書として開発者の Knuth 氏の書いた TeX book がよく引き合いに出されるが、実際にこの本を参考書にしている人は少ないだろう。L^ATeX のマニュアルか、小寺さんの書いた日本語の解説書などを利用している人の方が多いと思う。実用的にはこの方が使いやすい。でも、原理的なところに帰らなければならないときは Knuth 氏の本を読まないと分からないこともある。実際図書の引っ越しでは TeX book を参照した。Knuth 様さまだ。

さて、およそ 3800 個の段ボール箱に本を詰めていくと言った。これに通し番号を付けて行く。A4 の用紙に 1, 2, 3 ... と番号を印刷していく。これが 3800 番までである訳だ。これを Word で効率よく作るのにどうすればいいのか私には分からない。1 ページごとに番号を書き入れていくしか思いつかないが、そんなことはやりたくない。Word でも何か方法はあるのかもしれないが、TeX ではそれが簡単にできる。TeX はプログラミング言語でもあるので、そういうことは得意である。極端に言えば 1 行で出来る。実際はマクロをいくつか準備しないといけないので、メインの部分が 1 行ということだが。loop を使えばいい訳で、プログラミングをやったことがある人は容易に想像がつくと思う。これはありがたかった。後は印刷をすればいいだけで、こういうときは TeX は楽しい、と思う。印刷はプリンターが勝手にやってくれるので放っておけばよいが、ただ枚数が多いのでときどき紙を補充してやらないといけない。印刷されたものも山のように積み上がっていく。こういうところが数が多いことの恐ろしいところである。A4 のコピー用紙は 500 枚単位で袋詰めされているけれど、3800 枚だとそれが 8 個積み上がる訳である。最近のプリンターは印刷が速くなったけれど、それでもプリンターが悲鳴を上げそう。上げないけど。

ラベルは 2 種類用意して、段ボール箱の両面に貼り付けた。一つは通し番号で、もう一つには業者が用意した小ぶりのカードに中身の情報をもう少し詳しく書いた。雑誌の場合だと、通し番号に加えて、雑誌の名前と 5/20 というような分数を書いた。分数は今の場合、この雑誌は全部で 20 箱分あり、その 5 番目だということを意味している。これを見れば中身が大体分かる。これを準備するのは TeX だけではできなかった。雑誌名などを書いたデータファイルを別に用意しないといけない。データファイル (Excel から csv file をつくる) を読み込まないといけないので、プログラミング言語は Perl を使った。今なら Python かもしれないが。Perl を使うにしても、最後は TeX なので、TeX の有用性をしみじみ感じる。

下準備開始

さていよいよ 4 月 4 日から作業を開始する。博士課程の学生を総動員の形だ。使う段ボール箱は 450 × 325 × 240 のサイズなので、45cm 分の本が入る。小型の本だと上に隙間ができるので、そこにさらに本を詰め込むことが出来るが、それはしない。そういう細かな微調整は作業を複雑にする。単純が原則であった。しかし、隙間があると段ボール箱が潰れるのではないかと。確かにごく少数だが潰れた。潰れると言ってもぺしゃんこになるわけではな

いので大きな問題にはならない．基本的に段ボールは丈夫なので，端を合わせて積み上げればまず潰れることはない．少数の例外を気にするのは生産的ではない．

一箱 45cm なので，下の左側の写真のように 45cm ごとに本を区切っていった．本を倒して区切りにする．その後で，右側の写真のように倒した本に番号を付けた紙を挟み込んでいく．これをすべての本に対して行う．言ってしまうと作業はそれだけだ．問題は量が多いということだけ．大学院生にやってもらったが，とにかく根気のいる仕事である．学生は長尾君，福谷君，森谷君，森田君，山川君，山名君といった面々．教員の藤井さんや加藤（文）さんにも協力してもらった．この人たちはもともと 6 号館に居室があって，今回の引っ越しにはかかわらない人たちなので駆り出されたわけである．



単行本，シリーズ本，雑誌室の雑誌，1 階書庫と 3 階書庫の雑誌の 4 種類を色分けした．緑，白，ピンク，黄，の 4 色である．この 4 色の紙が図書室全体を埋めつくした．風が吹けばはためく．満艦飾である．

さて，本は段ボール箱に詰めて 1 号館に運ぶ．1 号館の 205 号室，025 号室，017 号室，016 号室，015 号室，009 号室の 6 つの部屋を使うことになった．各部屋ごとに何個段ボール箱が収容できるか見積もる必要がある．4 月 13 日に教員の加藤（毅）さん，山崎さんに現地で部屋の寸法を測り，平面で段ボールが何個並ぶか調べてもらった．段ボールは 6 段積んでいくので 6 倍すれば収容数が把握できる．これをもとに段ボール箱の割り振りを決めていく．

4 月 14 日には図書事務の引越し．図書事務は 6 号館の 7 階 706 号室に移った．後は本を段ボール箱に詰めて，1 号館に運搬する必要があるが，これはすべて業者が行うことになっているので，我々としては確認だけ行えばよい．業者は広江エンジニアリングというところが請け負った．本は大半段ボール箱に詰めて保管するが，シリーズ本は扱いが異なっているので，そのことから始める．

シリーズ本の移動

概念図のところで、シリーズ本は理学部中央図書の書棚に一時保管すると述べた。ということは書棚から書棚への移動である。従ってやり方が今までとは異なる。こういうときはブックトラックを使って移動すればいいのだが、図書室は3階でエレベーターが使えないという状況だった。ということはブックトラックが使えない、ということである。ではどうするか。段ボール箱に詰めるか。そんなことを思っていたのだが、2月13日に4月からの引っ越しについて業者と打ち合わせたときに、業者から 5cm × 30cm くらいの短冊状の段ボールを沢山作ってくれと頼まれた。古い段ボール箱ならたくさん残っているのでは訳はない。ただハサミやカッターで切っていたのでは埒が明かない。だが図書室にはいろいろ道具があって、裁断機というものがある。電動の裁断機である。手動の裁断機だと 20~30 枚が限度だが、300 枚くらいでも切れる。操作するのが怖い代物である。始動ボタンが二つあって、二つ同時に押さないと動かない。まあこういう強力な道具があるので、段ボールなんてザクザク切れる。ザクザク切れるので一種快感がある。思わず「カイカン!」と言いそうになるが、うっかり聞かれて「重川先生、カイカンって言うてはった。」などと噂になるのは恥ずかしい話なので、心の中だけのつぶやきに押しとどめておく。でも実際快感だった。



さて、段ボールの短冊をどうするのか。業者はバンド結束機というのを使って本を束ねていくのである。上の左の写真の様な機械である。ポリプロピレンのバンドでぐるっと回して縛るのだが、分かるだろうか。本を直接縛ると本が傷むので、束にした本の上下に短冊を挟んで本を保護する。そのための短冊なのだ。短冊は一括りに2枚いるので沢山いるわけだ。これで本が結束される。結束した本は、理学部中央図書の書棚まで運ぶ必要がある。運んで配架するまでを業者に頼んだ。前にも言ったが3号館にはエレベーターがない。階段を使うしかないのだが、業者はプロだから色々道具を持っている。上の右側の写真を見てもらいたい。彼らは滑車を使って、3階から地上までロープで吊っておろしていた。結束した本をケースに入れ、ケースごとロープで吊る。本はよく見れば、段ボールの短冊が挟み込んであるのだが分かるだろうか。上から下への移動なので重力を利用すれば楽そうに見えるが、重量の

あるものをコントロールしながらだから力仕事ではある。いずれにしろ業者任せだからこちらは見ているだけである。しかし作業の手順の良さはさすが手慣れたもので、餅は餅屋というか、パンはパン屋というか、プロはいろいろ技術を持っているものだと感心させられた。あとは理学部中央図書の書棚まで運んで、そこでバンドを切って本を並べる、という手順だ。ここはすべて業者が行った。

段ボール箱での移動

シリーズ本は上のように運んだが、大半は段ボール箱に詰めての移動である。4月20日に段ボール箱が業者により持ち込まれた。そして4月24日から段ボール箱詰めが始まった。段ボールひと箱分ごとに区切られているのでそれを目印に入れてもらう。入れ終わると段ボール箱の封をすると同時に、挟んであった番号札をラベルとして貼ってもらった。段ボール箱詰めは5月2日に終わる。下の左の写真は段ボール箱に詰められた単行本である。段ボールが詰め込まれているのがパレットである。ケージのようなものである。



さていよいよ段ボール箱を1号館に運び込む。5月8日に機材が持ち込まれた。5月9日から12日で業者により段ボール箱の運搬。上の右側の写真は図書から屋上への通路を確保した写真である。3階見取り図を見てもえれば分かると思うが、図書の一番奥の部屋から屋上に出来るのである。パレットは屋上に運ばれて、パレットごとクレーンで吊り上げてトラックに積み込まれた。業者がやることはやはり大掛かりである。

これで数学図書の本は3800個の段ボール箱に詰められ、1号館に運ばれた。1号館の205号室、025号室、017号室、016号室、015号室、009号室の6つの部屋に概念図のところで説明したように、順番に収納されることになった。次ページの左の写真で、段ボールで埋め尽くされた部屋の様子がうかがえるだろう。6段積みなので、人の身長程度まで積みあがる。

こうして本たちは1年間の眠りにつく。残った書架は日本ファイリングにより解体され大会議室に保管された（下の右側の写真）。大会議室は3号館の一部なのだが、今回は耐震補強の対象にはなっていないので、保管場所として利用されたのである。こうして、とりあえず3号館からの退去は一段落した。あとは耐震補強工事が終わるのを待つばかりである。



安田さんとお別れ

取り合えず、図書の一時避難は終わった。3号館のものはすべて1号館と6号館に移った。この状態で1年間工事が終わるのを待つわけである。そんなとき、図書事務の安田さんから突然退職すると告げられた。安田さんは2001年に図書の移動が始まったときから働いていた。耐震補強工事が決まってからも、3号館の退避が終わるまではと踏ん張ってくれていた訳だ。図書が一番大変な時期にやってきて、その真ただ中でずっと頑張ってくれていた。その安田さんを労うために、安田記念と銘打った送別会を7月28日にカフェ・ショコラ出町柳店で開催した。コーラの早飲み競技などという訳の分からないこともやりながらの賑やかな会だった。安田さんには、彼女にとって関わりの深い JMKU を模したお別れ文集を作って贈った。安田さんにとっても喜んでもらえてよかった。

これで2001年当時に図書事務にいた阪口さん、松田さん、安田さんと、すべていなくなってしまった。舞台が一回りした感覚だ。人が去っていくのは避けられないことではあるが、寂しいことでもある。安田さんの後任には理学部中央図書にいた池村さんが来ることになった。池村さんは中央図書の経験があるので、安心して任せられそう。実は数学の図書にも入力作業で時々やってきていた馴染みのある人でもあった。この新たな人を迎え、今度は3号館への復帰を目指すことになった。

雑誌を探せ

騒がしい退避作業が済んで、みんなそれぞれの一時避難場所に落ち着いた。私は6号館5階の502号室に移った。図書事務は6号館の7階706号室に移った。本はすべて段ボール箱に詰めて保管しているので貸出業務は完全にストップしている。ただ新着雑誌や単行本の購入までなくなるわけではないので図書事務としての仕事は存在する。そんな中である教員が雑誌を見たいと言い出した。雑誌はすべて段ボール箱に詰めているので見ることはできないと断った。

でもどうしても見たいという。それで現地に行って、すぐ取り出せる場所にあれば見せるが、奥のほうで取り出すことが困難ならあきらめるといことで納得してもらって、現地に赴いた。



雑誌の段ボールには通し番号と、別に雑誌名を書いた2種類のシールが貼ってある。雑誌名を書いたほうには分数が書いてあって、その雑誌の入った全段ボール箱数とその雑誌の中で何番目かということが分かるようにしてあることは以前説明した通りである。段ボールごとに巻号数が書いてあるわけではないが、全体の巻号数はデータとして持っているの、大体的見当はつく訳である。あとはすぐに取り出せるかどうかである。件の雑誌は幸いすぐ取り出せる場所にあった。幸運な人だ。巻号から大体この段ボールだろうということも見当がついた。さて本当にそこにあるのか。あって当然である。あるはずだ。本当にあるのかな。だんだん自信がなくなる。ドキドキする。恐る恐る開けてみると、確かにそこにあった。一発でビンゴだ。なんだか目頭が熱くなった。涙が出そうになった。出なかったけど。

新図書室構想

耐震補強工事を機会に図書室を作り変えられないか、ということ考えた。2階の構造にして内階段で繋ぐことができれば良いのだが、それをどう実現するか。現在3階に図書室があるので、2階部分を図書に改造できれば良い。2階と3階を内階段で繋がれば良い。2階部分は教授の部屋が並んでいるので、壁を取っ払ってひとつづきにする必要がある。それはできそうだが、2階部分には廊下がある。これは通路として確保しなければならないから、廊下を残すと図書の部分が広く取れなくなる。出来れば図書室は建物の端っこにある方がいいわけだ。そういうことを考えると、結局元のままでやるしかないように思え、半ば諦めていた。そこへ思わぬ方向から解決策が出てきた。それを説明するには数学教室の建物の歴史を少し語らなければならない。

数学教室がある建物は3号館と呼ばれているが、ここは以前は南半分を数学教室が、北半分を地球物理学教室が使っていた。そもそも数学教室の建物が作られたのは1934年の11月で、現在の建物の南半分の部分だけに相当する。北側部分が増築されたのは1959年の話で、この増築された部分は地球物理学教室が使うことになった。実は南側部分はしっかりしたつくりなのだが、それに比べると北側部分は材質が悪く、何回か補強の必要があったそうだ。1980年になって別に新しい建物が出来たので、地球物理学教室はそちらの建物に移った。その後は数学教室が使うことになって、結局3号館全体を数学教室が使えるようになった。但し、北ウィングの地下の部分だけは引き続き地球物理学教室が占有していた。実験室か何かとして使っていたようだ。ところが今回の耐震補強の折に、地球物理学教室が使っていた地下部分も数学で使えることになった。それで、この地下の部分を使って、1階と地階を図書

室にするという案が出てきた。建物の構造としても北ウィングの端っこになる。厳密には大会議室があるので、端っこではないのだが、大会議室は孤立した教室として使うことにして、図書室の場所は北ウィングの1階と地階とに決定した。それにしても図書室に内階段をつけるということは前から考えていて、それが実現したのでとても嬉しかった。今回の引っ越しの一番の収穫かもしれない。

図書室の入り口は1階になる。したがって図書事務も1階である。新着雑誌室は図書事務の隣で、残りが書庫になる。書棚は、以前のものをそのまま使うことになる。ただこれでは収容力が増えない。本というのは基本的に増える一方である。そこでこの機会に収容力を増やせば好都合である。場所は限られているので、集密書架を導入することにした。ところで我々は誰も集密書架なるものを知らなかった。話には聞かすが、実物を見たことがなかったのである。そういうときはまず実物を見に行こう、ということになる。

そこで、8月30日に文学部の図書室を見学に出かけた。文学部にあったものはかなり大掛かりなもので、電動式になっている。集約的に本を置けるので収容力は高そうである。普段は密集状態なので、あまり使わない本を保管しておく、という使い方をするものようだった。やはり実物を見るとイメージが湧いてよい。

さて、我々数学の場合は設置場所は地階なので、床が抜ける心配もいらない。かなり重いものまで耐えられる。あとは予算的な制約だけである。最初は一部分だけというような話だったが、結局地階の余った部分に全て集密書架を設置できることになった。あとから追加するのも余計に手間がかかることなので、初めから最大にしておくのが合理的な気はする。これで全体の収容力に関しても、かなり余裕のあるものができそうだ。

地球物理が使っていた北ウィングの地下も数学に移って、3号館は今ではすべて数学教室が使えることになったが、それでも1カ所だけ例外がある。数学教室七不思議といった趣だが、図書の一部に地球物理の部屋が残っている。これは数学教室関係者でも知る人は少ない。国際重力基準点というものが設置されている場所だ。耐震補強工事のときにそれも移転するという話はあったのだが、結局残ってしまった。おいそれとは移動できない代物なのだろうと思う。地球物理の人達にとっても、この部屋を使うときはわざわざ数学教室まで出向かなければならないので不便だとは思っているのだが。

耐震補強工事の現場



図書の耐震補強工事進行状況を見学させてもらったことがある。上の左側の写真は10月

27日のときのものである。3号館の地下で、まだ壁はむき出しのままだ。この場所は雑誌を配架するスペースになる。赤く塗装された鉄骨があちこちに配置されて、確かに補強されていえるように見える。このために補強工事を行ったわけだ。

上の右側の写真は2007年2月19日のもので、内装工事もほぼ終わり、完成まじかの工事現場である。ここは3号館の1階で、単行本やシリーズ本の配架スペースになる。鉄骨の斜めの梁があちこちに補強されているのが分かる。こうしてみるとかなり広いスペースに思えるが、ここに書架が設置されて、本で埋まっていくわけだ。

螺旋階段



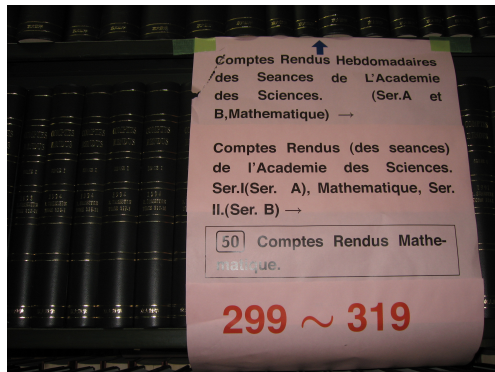
図書室に内階段をつけるということは考えていた。それが実現したので嬉しく思っていた。これで2階の構造の図書室になる。10月の下見で実物を見てちょっとびっくりした。写真のような代物である。工事中的のもののだが、むしろこのほうが構造がよく分かるだろう。もっと直線的なものを想像していたので意外だった。しかしこれは暫く使って撤去してしまった。その意味では失敗だった訳だ。別に螺旋階段だからいけないというわけではない。くるくる回るので利用者に目眩を起こすものが続出、なんてことはなかった。問題は別のところにある。こういうことは実際に仕事をする人の立場に立たなければわからないのかもしれない。図書室なので、図書を運ぶことをしょっちゅうしなければならない。本はまとまると結構な重量になる。いちいち階段を使って人手で運ぶのは負担なのだ。そこでダムウェーターをつけることになった。ダムウェーター

というのは、小荷物専用昇降機のことだ。小型のエレベーターのようなものである。小さいので人を運ぶことはできないが、運ぶのは本だからちょうどよいわけである。それで螺旋階段の場所にダムウェーターと直線的な階段を設置した。初めからそうしておけばよかったわけである。私にはそういう発想はなかったし、これを設計した人もそうだったのだろう。やはり現場の感覚で物は考えなければならないものだと思感した。なんにしろ普段からいろいろ見ておくことは大事なことなのだと思う。現場の視点でなければわからないことは多いのである。

図書の帰還準備

今度は図書が戻るわけだが、どんな作業をするか説明しておこう。全体の流れは引っ越しの概念図の中で説明した通りだが、具体的に何をするのか。次の写真を見ながら説明する。写真自体は3号館に戻ってからのものだが、貼られたものを見てもらいたい。これは雑誌の配架位置を指示するラベルである。まず紙の色がピンクなのでこれは雑誌のことだとわかる。よく見ると

この雑誌は2度誌名変更があったことが分かる。最初は Comptes Rendus Hebdomadaires des Seances de L'Academie des Science. (Ser.A et B, Mathematique) で、それが Comptes Rendus (des seances) de l'Academie des Sciences, Ser.I (Ser.A), Mathematique, Ser. II (Ser. B) になり、最後に Comptes Rendus Mathematique になって現在に至っていることを表している。



下段の 299~319 という表示は、この雑誌が誌名変更前の分も含め 299 から 319 の番号のついた段ボール箱に入っていることを意味している。このラベルがこの雑誌を配架するスタート地点に貼られているわけだ。従ってピンクでこの番号のラベルの貼ってある段ボール箱を持ってきて、ここへ番号順に本を並べていけばよいということになる。こういうラベルをあらかじめ準備すればよいわけで、必要なデータはすでにあるので、それに基づいてこれを出力するプログラムを組めばいいわけである。それが私の仕事で、初歩のプログラ

ム実習の練習問題みたいなものだ。ただ雑誌が600あまりあるが、データさえそろっていれば千だろうと万だろうと変わりはない。それがプログラムの強みだ。これが10個などだったらプログラムを組むのは間違いで手作業でやるべきことになる。

このプログラムを書いたのは私なのだが、実は私はプログラミングの正規の教育を受けたことがない。すべて我流だ。なので私の書くプログラムは美しくない。かの Knuth 大先生ならなんて dirty なプログラムかと顔をしかめることだろう。何しろ Knuth 先生は、プログラムはアートだとおっしゃっている。なるほどアートかあ。やっぱり Knuth 先生は雲の上の存在だと改めて認識する。

さて、このラベルを作って、それをどこに貼るかを決める必要がある。はじめは元の場所に戻る予定だったので、その場所に貼ればよかった。だが図書の場所が変わった。書架の配置も変わったし、集密書架が加わった分、配分も変わった。個々の部分は新たにやり直す必要がある。しかし今まで何度もやってきたことなのでやり方に戸惑うことはなかった。修練のたまものというか、こんなことばかりをさんざんやってきたわけだ。その成果が今まさに花開いた、なんてそんないいものではないが。

3号館に戻るときのことはあらかじめ考えておかねばならない。そのために夏休みころから図書の事務の人たちと打ち合わせをしていた。週一回程度でミーティングの機会を持った。さらにメンバーの中に数学事務の篠崎さんにも入ってもらった。図書の配置図などを作る手伝いをしてもらった。上で述べたラベルを貼る位置を計算してもらった。それから教員では国府さんに入ってもらって、全体のプランなどを一緒に考えてもらった。今回の引っ越しは、力のいる作業は業者に任せてあるので、リスト作りなどの事務作業をこちらが担うことになる。従って学生を使うことは少ないので、事務の人の力をいろいろ借りた。

書架設置

3月8日から書架の設置が始まった。次のページの写真は地下の雑誌を置く書架である。左側の写真のように、まず支柱の設置を行う。次に右側の写真のように側板と棚板をつけてい

く。あとはこの作業の繰り返しである。何ものなければ広い空間であったが、中身が詰まってくると、ものがひしめいている感じになる。3月8日には1階の図書室の部分の書架の設置が始まった。図書室にはシリーズ本や、単行本がおかれることになる。解体されていた書架は3号館の会議室に保管されていた。会議室は、実は図書室の西隣なのでその点は移動が楽だったと思われる。3月13日から作業は地階に移る。地階は雑誌室で、雑誌が配架される。また集密書架の設置も並行して行われた。この集密書架にはやはり雑誌が置かれるのだが、こちらは利用頻度が少ない雑誌をおくことにした。集密書架は保管が主体で、使われることの少ない書籍を置くような使い方をされることが多い。3月22日には書架の設置がすべて終わった。



集密書架内覧会



3月23日に電動の集密書架の内覧会が行われた。日本ファイリングの担当者が来て説明をしてくれた。数学図書としては、集密書架の導入は初めてである。我々は文学部で実物を見ておおよそを理解していたが、初めて見る数学教室の人たちも多かったことだろう。実際に動かして実演してくれた。集密書架は、他の固定式の書架に比べると背が低い。基本的に最上段まで手が届く必要があるのもそれ以上は高くできないわけだ。書架が動くのであまり高いと安定しないだろうし。この集密書架は電動で、普段は密集した状態で本は見えない。必要な時に必要な部分をスイッチがついているのでそれを押す。そうすると、右なり、左なりの書架が一斉に移動するので、開口部だけ本が見えるようになる。かなり大きなものが移動するので、おおっ、という感覚になる。もし中に人がいて、こんな鉄の塊が迫った来たらどうなるのかと心配になる。こういう非常事態の対処法は最初に理解しておくべきだろう。書架の下の方に赤い部分があり、これが緊急用のストッパーになっている。書架が動いて迫った来たらこのストッパーを蹴る。このことは肝に銘じておく必要がある。それ以前に、使うときは開口部があれば必ず人がいないことを確かめる、というのが第一なのだが。

この日はまた、西田吾郎教授の定年退職記念パーティーの日でもあった。京大会館で開催された。

新図書室受け入れ準備

かくして全ての書架が設置されると、いよいよ本を運び込む準備をしなければならない。ここは我々の仕事である。

3月8日から書架の設置が始まっていたが、6号館から3号館への移動は3月には始まっていた。6号館にあった図書事務は、3月5日に3号館の125号室に移った。125号室は3号館1階の北東角に位置する。3号館北ウイングの1階が図書になるのでその一角である。私も3月6日に3号館の元の部屋に戻った。きれいになったが、上段の窓がなくなっていて開放感がなくなった。その上パイプスペースが新たにできてちょっと狭くなった。と文句を言ってみたが、京大の数学教室の教授の部屋はずいぶん広い。他の大学にも行ったが、この部屋よりは狭かった。海外の教授連もこの部屋を見ると「お前の部屋は広いな」とやっかみ気味に言うことが多かった。なんでこんな奴がこんな広い部屋に陣取っているんだ、といった気分かもしれない。それはそれとして、3月中に教員は全員3号館に戻った。4月からは講義が始まるので、それまでに移ってしまうということである。



新着雑誌の配架書架は3月23日に図書事務の南隣の部屋に設置され、だいぶ図書らしくなってきた。あとは本が返ってくればいいだけであるが、その前にやっておくことがある。図書の配架位置を示すラベル貼りである。本の開始位置を示すラベルはすでに述べたように準備できている。それを書架に貼り付けていかなければならない。ラベルの貼り付け作業は3月22日から始めた。この作業は業者はかかわらないので我々でやる必要がある。今回は学生はほとんど使わないで、図書事務の人と教員とで行った。棚ごとの配置図を作っ

ているので、それに従ってやればいい。1階の図書室から初めて、地階の雑誌室をやり、最後に集密書架を行った。集密書架は開口部が一か所なので同時進行ということができない。効率は悪いが、順番にやっていくしか仕方がない。上の写真はそのときのものである。作業が終わってみんなで撮った。後列左から（敬称略）国府、加藤（文）、篠崎、本多、中列左から杉山、少し空いて重川、池村、前列左から斎藤、西村である。後ろの書棚に貼ってあるのがラベルで、これを全ての棚に貼っていったわけである。この作業が3月26日に終わった。

2007年度の始まり

さて、いよいよ最後の年である。本の受け入れ態勢は整った。あとは本を運び込むだけである。ここからの搬入作業は依頼した業者の仕事である。だが配架に関しては、確認の意味もあって図書事務の人や教員も一緒に手伝った。みんなで一体になってやっている感覚で、業者の人もととても丁寧に仕事をしてくれたように思う。結構親密感が感じられた。

3月で数学教室としては引っ越しは終わっていた。4月になって新学期が始まり、平常運営が動き始めている。そんな中で図書だけが取り残されていた。本の搬入作業がまだ残っている。いつでも図書が一番最後になる。一番大きいので、どうしても動きが鈍くなるのだ。4月2日から搬入作業が始まった。1号館の段ボール箱を図書に運び込む作業だ。まず1階の図書室の単行本から始まった。下の左の写真は運び込まれた単行本の段ボール箱である。これが999箱ある。図書室は1階なので搬入作業はトラックを建物に横付けにして行うことができる。これを運び込んで、並行して段ボール箱を開けて配架作業を行う。単行本は配架まで4月3日には終わった。続いて4月3日には地下の雑誌の段ボールも運び込まれた。下の右側の写真はクレーンを使って運び込んでいる様子である。地下の雑誌室は、地下といっても窓があってドライエリアに開いている。従って外につながっているので、クレーンで吊れば窓から搬入できる。3号館から運び出すときは、屋上からクレーンで運び出したが、今度は地下である。4月4日から地下の雑誌の配架が開始された。同時に、6号館の理学部中央図書に置かせてもらっていたシリーズ本の搬入も始まった。これは1階から1階の移動なので、パレットに詰めてそのまま運べる。配架も割と楽である。



集密書架への移動は4月6日から始まった。こちらは3階書庫と1階書庫におかれていたもので、使用頻度の低いものである。集密書架はすでに述べたように開口部が一か所なので作業能率が悪い。量的には主要な雑誌より少ないが、手間はだいぶかかる。結局4月13日までかかった。シリーズ本の配架も4月13日に終わった。左の写真はそのときのものである。左から（敬称略）藤原、田中、原田、国府、橋本、伊藤、池村。これで一応、本の配架は終わったが、写真を見れ

ばわかる通り剥がれかかったラベルがぶら下がっていたりと、これから後始末をしていく必要がある。それはおいおいやっていくとして、とりあえずは引っ越し作業の区切りはついた。大体作業が一段落すると慰労会をすることになっている。今回は四条のジンジャンクラブで行った。学生たちも参加して、いつものようににぎやかだった。今までいろいろやってきたけれど、これで本当に終わりだなあという気がした。やれやれである。

貸出開始

5月7日より貸出再開。四月半ばまで引っ越し作業をしていたので、平常運転に戻るまでの時間としてはまずまずの出来ではないだろうか。再開時より、貸し出しもバーコードで行うようになった。貸し出しカードによる管理が終わり、電子的に手続きができるようになった。いつかはバーコードに移行をと考えていたが、それがようやく実現した。さっさと実現させればよいものを、何ゆえにこれほど時間がかかったのか。当然のことながらそのためには準備が必要になる。とにかく所蔵図書のデータを入力する必要がある。新規購入の本は逐次、データ入力を行っていたが、古い本のデータも入力する必要がある。これを遡及入力という。数学教室が持っている本を現物を前に一冊ずつ確かめながらデータを入力していくのである。この作業を図書の事務の人や、学生バイトを使ってずっと続けていた。本の移動の作業を行っているのに並行して、そうした作業が営々と続けられていたのだ。そしてようやくバーコードで貸し出しができるようになった。もちろんシステムは京大の附属図書館が用意したものに乗っかっているだけだ。それでも、必要な書籍データは我々数学教室のような末端の組織が担っている。大きなシステムは無数の末端の組織の下支えによって成り立っている。それが現場の力というものなのであるが、現場の大変さということでもある。

京大の、さほど大きくないシステムにおいてもそうなのであるから、国家レベルのシステムならなおさらであろう。例えばマイナンバーカードなどが頭に浮かぶ。デジタル庁が旗を振って普及に努めているが、言うほどには普及していない。その運用はすでに走り始めているのだが、十分に有効活用されていないのが現状だという。未だにマイナンバーカードを持たない人も多い。確かにこのカードの利便性は多いと思う。様々な情報と結び付けられれば、さらに利便性は高まる。戸籍、住民票、給与、税金、年金、健康保険などなど、個人に繋がるデータは多い。しかしこれらのデータを入力していくのは末端の組織である。地方自治体や、企業、病院など多岐にわたると考えられる。デジタル庁がいくら号令を掛けても、末端の組織がすぐさま機敏に動けるわけがない。そのための説明や調整、支援が必要になってくるだろう。時間をかけてじっくりやる必要があると思うが、急ぎすぎてほころびを繕うのかえって時間をとった印象がある。入力ミスがあとから発覚という話をよく聞いた。末端組織への目配りが充分になされていなかったのではないだろうか。中央官庁は大変だろうとは思うけれど、そういう現場の感覚というものを尊重すべきだろうと思うのである。データは、入力してしまえば、それを処理するのはそれほど大変ではない（とは言っても、データの種類が錯綜してくると新たな問題が起きはするが）。だがデータ入力そのものが結構大変であることは理解しておくべきだろう。そしてそれは末端の下部組織が担っているのである。そんなことを、数学図書のバーコード化を見ながら思うのであった。

そんなわけで、数学図書の貸し出しは再開された。2001 年度から始まった図書の移動作業であるが、それがようやく終息し、いつもの静かな図書が戻ってきた。ちょっと感慨深いものがある。振り返ってみれば本当にいろいろな人に助けられた。一つの教室の図書室ではあるが、多くの人に支えられて成立しているのだと痛感する。これからもみんなの力で図書をよいものにしてほしい。

新しくなった図書室は、以前 3 階にあったときと比べて随分明るくなったと思う。雰囲気が変わった。使い勝手もよくなったのではないだろうか。図書の入り口も自動ドアになった。図書室に入ると、左側に小窓があって、数学図書が所蔵物などの説明がある。そして可愛い干支人形が飾ってある。これはまあ可愛いからというので飾ってあるわけだが、数学と縁がないわけではない。よく見ると本を広げている。つまり数学書を広げているわけだ。皆さんもこの図書をおおいに利用して、数学の研究を深めてもらいたい。それを可能とする充実したサービスを提供できる図書室だと思う。みんなでこの図書室を大切にしていってほしい。そんな願いを込めて筆を置く。(2024 年 6 月 12 日)